

第五章 東南アジアにおけるイスラムの宗派

第五章 東南アジアにおけるイスラムの宗派

〈155〉東南アジアにおけるイスラムの宗派を検討するに当たり、ここでは少なからぬ地域で 16 世紀まで信仰されていたいくつかの宗派に範囲を絞ることとする。東南アジアの少なからぬ地域で信仰されていたイスラムの宗派はシーア派、シャフィー派とハナフィー派であった。イスラムの宗派は通常 madzhab(宗派)という言葉で呼ばれている fiqh(イスラム法学)によった。

第一節 シーア (Syi'ah)派

最初に東南アジアにもたらされたイスラム教はシーア派であったことは既に簡単に述べたとおりである。シーア派は 12 世紀の初頭にグジャラート、ペルシャ、アラブ商人たちによってスマトラ東海岸、特に Perlak 国と Pasai 国に持ち込まれ、エジプトのファーティマ朝の支持を受けていた。シーア派はペルシャとヒンドスタン¹で花開いた。ペルシャとインド商人の多数はイスラムシーア派であった。シーアとは「党」あるいは「グループ」を意味する。この呼称は、カリフは Ali とその子孫だけが相続できるという見解を持つ Ali の同調者たちにつかわれている。イスラム歴 40 年に Ali は敵に暗殺された。Ali の長男の Hasan が Ali の同調者によってカリフに持ち上げられたが、Muawiyah(ウマイヤ)が税金を彼に支払うことを約束した時、Hasan は自発的にイスラム法学者(imam)の職を辞したのであった。〈156〉ウマイヤ朝は連続してシーア派と Kharijah(ハワーリジュ)派²からの攻撃を受けてはいたものの 90 年間持ちこたえた。Kharijah 派の信者たちの多くは東アフリカと南西アフリカに住んでいた。シーア派は 16 世紀にはペルシャの公式な宗教になっていた。シーア派の信者数はペルシャと Hindustan 沿岸部、中央アジア、シリア、アラブ西部、エジプトで最大であった。12 世紀の初頭にスマトラ東岸にやってきたペルシャ、アラブ、グジャラートの商人たちがシーア派を持ち込んだことは理解できるのである。彼らはスマトラ東海岸に居住し、エジ

¹ (訳) インド北部地方

² イスラム教の初期に多数派 (のちのスナ派とシーア派) から政治的理由で分離することで成立した派。(出典 Wikipedia)

プトのファーティマ王朝の援助により Peureulak 川の河口に Perlak サルタン国と Pasai 川の河口に Pasai 国を建設した。香料の交易以外に彼らはシーア派のイスラムを広めたのであった。

1268 年にファーティマ王朝が消滅して以来、スマトラ東海岸のシーア派とエジプトのシーア派との連絡が途絶えた。1285 年にシャフィー派の新しい王朝がエジプトにおきた。この新しい王朝はマムルーク朝であった。マムルーク朝は同地のシーア派を殲滅するために Syaikh Ismail をスマトラ東海岸に派遣した。Syaikh Ismail は Marah Silu をシャフィー派に転向させることに成功し、彼を Malikul Saleh の名で新 Samudera サルタン国の初代サルタンに即位させた。Malikul Saleh が支配している間、シーア派は弾圧された。1295 年以降、シーア派は、Malikul Mansur という名の Malikul Saleh の息子に率いられた Aru/Baruman サルタン国において新風を得た。そして 16 世紀の半ばに Pajang サルタン国が建国されて以降シーア派は中部ジャワでの市場を得たのであった。Wali Syaikh Siti Jenar あるいは Syaikh Lemah Abang がその主要な指導者になった。〈157〉その教えの影響で、Syaikh Lemah Abang は他の伝道者たちによって火あぶりの刑に処せられた。スマトラ東海岸での主なシーア派の指導者たちの間に Iskandar Muda の治世下に Baros³出身の Hamzah Fansuri と Syamsuddin al Samatrani がいた。このアチェサルタン国のシーア派も後日 Syaikh Nurrudin Ar-Raniri に率いられたシャフィー派の同調者によって撲滅された。

シーア派の考え方の基本はこのようである。ムハンマドの威光は子孫を通じて相続される。ムハンマドの子孫は Fatimah である。Fatimah は Ali ibn Abi Thalib と結婚した。この結婚から Hasan と Husain という二人の息子を得た。この二人の息子の Hasan と Husain だけがムハンマドの威光の正式な相続権を有する。Ali Fatimah の子孫以外の人たちはムハンマドの威光を相続できない。この考え方の結果で、ウマイヤ朝や Abasiyah(アッバース)朝から出た王朝はムハンマドの威光を相続できないということになった。シーア派ハディースのグループにとって、正しいものは Ali Ibn Abi Talib, Fathimah, Hasan, Husein に下されたハディースであった。他のハディースは daif すなわち正当なものではないというのである。

Hasan と Husain は Karbela の戦いで戦死した。Hasan と Husain の死は殉教であつ

³ (訳) 北スマトラ Sibolga の北西約 70km の港町

た。Hasan と Husain はイスラム教の受難者であった。この死に悔やみ、涙する必要があった。Muharam 月の 10 日の命日それ自身がシーア派にとってもっとも高貴な日である。それ故、その日はシーア派は宗教上の英雄 Hasan と Husain の死を記念している。この記念行事は Idul Fitri⁴よりはるかに盛大に挙行されるのである。他のイスラムグループの人たちにとって Idul Fitri は最も盛大に行われるが⁵シーア派にとってはそうではなく、Muharam 月の 10 日が最も高貴で盛大に祝われるのである。Hasan と Husain の死は嘆きと涙をもって悲しむべきなのである。それ故、シーア派には Hasan と Husain の死に涙することを通じて人生を完ぺきにしようとする修行僧がいるのである。〈158〉Hasan と Husain の死に涙することで弔意を表すだけで賞賛される行為となる。Hasan と Husain は殺されて埋葬されたというのが現実である。このことから、Hasan と Husain の墓所はシーア派の人たちにとって Ka'bah より神聖な場所なのである。Hasan と Husain の墓所に参詣することはメッカとメディナに参詣するのと同じ価値があるのである。メッカとメディナがウマイヤ朝やアッバス朝に支配されていたので、その地に参詣することはシーア派にとって実際に極めて危険であった。それ故、Hasan と Husain の墓所に参詣することはイスラムの「五行」の代替になったのである。

シーア派はアッバース朝とウマイヤ朝のイスラム指導者としての地位を認めなかったため、アッバース朝とウマイヤ朝の地位を認める Sunah⁶はから最大の敵として見られたのであった。その影響で彼らは追及され続けた。スンニ派はシーア派を撲滅しようとした。どこでもスンニ派はシーアの教えを払拭しようとした。イスラムの発展の初期から、スンニ派が支配権を握っていたため、シーア派は常に圧迫され、肉体的のみならず教義的にも大変な痛みをこうむったのであった。このような状態ではあったが、彼らは降参を良しとはしなかった。その信仰の旗印になったのは痛みを耐えることであった。彼らが望んでいるのは救世主(Imam Mahdi)の来訪であった。彼らは Hasan と Husain の魂が救世主としてこの世に再来することを信じている。

シーア派の神学は tasawuf wujudiah⁷であった。この実存神学の内容とはすべての形あるものはアッラーの光の照射である。人間は地球上でできた物質の一つである。

⁴ (訳) 断食明けの大祭

⁵ (訳) これはインドネシアのことで、1980 年代のヨルダンでは Idul Adha = hariraya hajiの方が盛大であったと聞く)

⁶ スンニ派

⁷ (訳) 実存神学の意味か?

それ故、人間はアッラーの光の照射でもある。アッラーの光はアッラー自身であるから人間はアッラーであるということである。実存神学は照射の教えすなわちアッラーの光に関する教えと呼ばれている。実存神学はバグダッドで火あぶりの刑に処せられたスーフィーの Al-Hallaj によって発展されたものである。その教えの根本は ana al-haqq 私は神であるという文章に定義される。アチェのサルタン国では修行イスラム僧と Hamzah Fansuri とスーフィー神学者の Sayamsuddin Al Samatrani が Sultan Iskandar Muda の時代に実存神学を教えた。Sultan Iskandar Muda の死後、アチェ・サルタン国はスンニ派神学者であるグジャラート出身の Nurrudin Ar Raniri の訪問を受けた。Sayamsuddin Al Samatrani の実存神学は Nurrudin Ar Raniri に撲滅された。実存神学を含む本はすべて焼かれた。Pajang の Sultan Adiwijaya の治世にこの実存神学は中部ジャワのジャワイスラム社会に大きな影響を及ぼした。ジャワの実存神学は walisongo の一人である Syaikh Siti Jenar 別名 Syaikh Lemah Abang によって推し進められた。Syaikh Siti Jenar も秘密にしておかなければならないもの広めたと非難され火あぶりの刑に処せられた。換言すると、実存神学はムスリムの中でもほんの一部の人たちにしか知らされてはならない宗教上の重大な秘密であったのである。シャフイー派の人々は実存神学者をイスラム教の逸脱者として理解したのであった。それ故、払しょくすべき存在であったのだ。

シーア派はアチェ地域からミナンカバウ地域に広まった。アチェ東岸からミナンカバウ地域へのイスラム伝播は 1128 年以降開始された。その時、Nazimudin Al Kamal 提督はアチェ海岸から Kampar kanan と kiri 川にその地区の胡椒を支配するために軍を移動させていた。Nazimudin Al Kamal は 1128 年の遠征の途中で死亡し、遺体は Kampar Kanan 川の河畔の Bangkinang に埋葬された。Kampar Kanan と Kiri 川地域はシーア派の外国商人に支配されエジプトのファーティマ朝に支えられた。〈160〉この胡椒は Perlak 港に運ばれ、続いてグジャラートに運ばれた。最も重要な Kampar Kanan と Kiri 川地域の地域を支配するための外国商人の最大の目的とはイスラムを広めることではなく、胡椒の独占権を確立することであった。それ故、12 世紀においてミナンカバウ人たちはイスラムをまだ知らなかったのである。

1513 年以降初めて、アチェの属国であった Pariaman を支配していた Tuanku Burhanudin Syah の尽力によってミナンカバウ地域のイスラム化が積極的に進められ

た。16 世紀の初頭以来ミナンカバウで広められたのはシーア派イスラムであった。Tuanku Burhadnudin Syah はアチェ・サルタン国を共に建国した Mahkota Alam の Sultan Syamsul Syah の息子であった。ミナンカバウ地域の胡椒生産を支配するために Tuanku Burhanudin Syah は、外国商人がファーティマ朝のスポンサーの下に行ったようなミナンカバウへの軍の派遣をせずに、ミナンカバウの住民たちをイスラム化したのであった。そのために Tuanku Burhanudin Syah はミナンカバウの住民たちの間にイスラムを広めるためのイスラム法学者を養成しようとした。このイスラム法学者の養成は Tuanku Burhanudin Syah によって十分に管理された。このようなやりかたで、ミナンカバウ地域の胡椒産品は Pariaman 港に下ろされることが確実となった。Pariaman におけるイスラム法学者の養成所で教える宗教上の教師は Kambayat あるいは Gujarat から呼び寄せた。彼らはシーア派の信者であった。1697 年まで Pariaman でのイスラム法学者養成の管理は Tuanku Burhanudin Syah の代々が行った。このイスラム法学者養成のおかげでシーア派イスラムはミナンカバウ地域の片隅まで浸透したのであった。

それまで自由に生きてきたミナンカバウ地域のシーア派のイスラム教徒たちは宗教上の禁忌を気にかけなかった。彼らは闘鶏や賭博、飲酒、アヘン吸引などイスラム社会では禁止事項(haram)であり一般社会でも悪行とされていることを行っていた。〈161〉伝統派の人たちはこのような行為をうれしく思っていなかった。1803 年以降、メッカから帰ってきたばかりでワハビー(ワハビー)派とハンバル(Hanbali)派イスラムの教義を得た Piobang と Sumanik, Miskin の三人のハッジが伝統派の攻撃の標的になった。上記のワハビー派の三人はミナンカバウ地域でシーア派に挑戦するための運動を始めた。彼らは宗教の浄化運動を形成したのであった。シーア派による社会的犯罪行為を中止させなければならなかったからだ。この運動は多くの大衆の支持を受けた。それゆえ、シーア派を奉じる伝統派とワハビー運動に入った人たちとの間の軋轢が強まったのだった。この軋轢はすぐに爆発して Padri 戦争に変化していった。

外国支配を排除するという目的をもった Abdullah Ibn Saud の指示に従ってワハビー運動を構築するという理念は、大衆の側からの賛同が得られなかったので、Piobang と Sumanik, Miskin は当初絶望した。当時、支配されていると感じている人がいなかったからである。大衆は各々の氏族の族長に率いられていた。ミナンカバウ地

域での外国支配に対抗するという理念は妙な理念であると理解されていた。彼らは治安を乱すものと考えられて各々の村から追い出された。彼らは Sungailandih のモスクに集まった。Piobang と Sumanik はエジプトに戻り Muhammad Ali Pasya 将軍に報告しハナフィー派イスラムに宗旨替えすることに賛成した。しかしながら、彼らは Miskin に、後日 Abdullah Ibn Sauf がエジプトを奪うことになったらワハビー軍によって切り刻まれてしまうぞと脅かされた。エジプトに戻るのは中止せよと。彼らは宗教浄化運動を行うことで一致した。このような経緯で、ミナンカバウのシーア派はワハビー運動で撲滅されてしまった。〈162〉ワハビーが Karbela を奪った 1801 年のワハビー運動によりイラクのシーア派は一掃されてしまった。その時シーア派のモスクと Hasan と Husain の墓所も焦土作戦でなくなってしまった。

第二節 シャフイー (Syafi' i) 派

シャフイー派の創始者は 767 年に生まれた Muhammad ibn Idris as-Sayafi' i である。シャフイーはその派をバグダッドで、その後エジプトで教えた。シャフイー派がインドネシアに来たのはシーア派より後であった。シャフイー派がエジプトのファーティマ朝を滅ぼした後、彼らは 1284 年にマムルーク朝を建てた。このような経緯で、エジプトのマムルーク朝はシャフイー派イスラムを奉じていた。スマトラ東岸地域でのシーア派の影響を絶滅するために、Perlak と Pasai サルタン国を手始めにマムルーク朝は 1285 年に Syaikh Ismail をスマトラ東海岸に派遣した。スマトラ東岸で Syaikh Ismail はシーア派を信仰していた Marah Silu と出会った。Syaikh Ismail は彼をシャフイー派に転向させることに成功した。Syaikh Ismail に率いられたマムルーク朝の艦隊の支援で、Marah Sillu はシーア派の Pasai サルタン国の支配を終わらせることに成功した。Marah Silu はその後エジプトの Syaikh Ismail によって Sumudera サルタン国の初代サルタンに就任した。このように、シャフイー派イスラムをインドネシアに持ち込んだのはエジプトの Syaikh Ismail であった。インドネシアで最初にシャフイー派に入信したのは Marah Silu 別名 Sultan Malikul Saleh であった。Marah Silu の二人の部下の Seri Kaya と Bawa Kaya もシャフイー派に入信した。彼らはその後改名してそれぞれ Sidi Ali Chiatuddin と Sidi Ali Hasanuddin となった。Malikul Saleh の治世下で Samudera サルタン国内のシーア派は一掃された。しかし Malikul Saleh の死後、シーア派は、Malikul

Mansur という名の Malikul Saleh の息子に率いられた Aru/Baruman サルタン国において新風を得た。Samudera Pasai のサルタン Zianul Abidin Bahian Syah の娘とマラッカ王の Parameswara との婚姻のおかげで、シャフィー派はマレー半島の西岸で花開いたのであった。〈163〉Sultan Prameswara はシャフィー派イスラムを信じるようになり、1414 年には名前も Megat Iskandar Syah に改名した。その年以前は、マラッカは事実上建国途上の王国であった。Parameswara 王がイスラムに入信して以後この王国は変わり、サルタン国になった。実際にはその性質は同じであったが。Megat Iskandar はマラッカを出てスマトラ東岸とマレー半島東岸にまでその支配地域を拡大することに積極的であった。Aru, Rokan, Siak, Kampar, Indragiri はマラッカサルタン国の支配地域に入った。シャフィー派イスラムの拡大はマラッカサルタンの支配地域の拡大と並行した。マレー半島全体がマラッカサルタンに屈服したといえる。このシャフィー派イスラム派 15 世紀末までスマトラ東岸地域とマレー半島西岸地域を支配していたのであった。

シャフィー派のジャワへの拡大は 15 世紀末まで成功しなかった。Syaikh Maulana Ishak はそのためにジャワに派遣されたのであった。ジャワ島への途中、彼は Ngampel Denta に投宿し、Sunan Ngampel と出会った。この計画は失敗したのだが Syaikh Ishak が Blambangan をイスラム化する使命を帯びていたと Serat Kanda は明確に語っている。その後彼はマラッカに戻った。Serat Kanda によると、Syaikh Ishak は Raden Rahmat 別名 Sunan Ngampel の叔父であり、Sunan Ngampel はチャンパからの来訪者である。彼の本名は Bong Swi Hoo である。Bong Tak Ken の息子の Syaikh Maulana Ishak もチャンパからの来訪者であり、Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel と同じくハナフィー派の信仰を持っていたことは不可能とは言えない。

第三節 ハナフィー (Hanafi)派

ハナフィー派の創始者は Abu Hanafi である。ハナフィー派はトルキスタン、ウズベキスタンのブハラ、サマルカンド、インド、トルコという中央アジアで最も知られている。〈164〉トルコではハナフィー派がトルコの国教になっており宗教を支配している。1517 年にトルコ軍がエジプトのマムルーク朝の主権を奪い取ってアラビア半島を支配した。

マムルーク朝はシャフィー派を奉じていた。このようなことで、シャフィー派の人たちはエジプトのみならずアラビア半島でもトルコのハナフィーの人たちに従わなくてはならなかった。

ハンバル派のイスラム法学者である Muhammad ibn Wahab は 1740 年にトルコの支配に反対する運動を編成しようとした。反トルコ運動はハンバル派の支持でアラビア半島中に速やかに広まった。Muhammad ibn Wahab はリヤド出身のベドウィン族 (Badawi) である Muhammad ibn Saud と一緒に働いた。この共同作業は Muhammad ibn Saud が率いるワハビー軍を立ち上げることを成功させた。アラビア半島からトルコ軍を排除することに成功するより前の 1764 年に Muhammad ibn Saud が死去した。彼の地位は息子の Abdul Aziz ibn Saud に継承された。Abdul Aziz ibn Saud はワハビー派のイマムとして存在した。Abdul Aziz ibn Saud の指揮下でワハビー軍はイラクを占領しシーア派のペルシャ軍が支配していた Karbela⁸を奪取することに成功した。シーア派のモスクと Hasan-Husain の墓所は焦土作戦に会って壊滅した。1802 年に Abduk Aziz ibn Saud の息子である Abdullah ibn Saud がメッカとメディナを奪取しアラビア半島からトルコ軍を排除することに成功した。このハナフィー派と関連するトルコの支配からメッカとメディナを解放したので、ワハビー運動がすぐに世界的に有名になった。

Piobang と Suminak、Miskin のミナンカバウ出身の三人のハッジはハナフィー派のトルコの軍隊に入った。彼らはメッカでの軍務についた。ワハビー派の攻撃で彼らは捕虜になった。彼らはトルコ人ではなく外国人であった故に殺されなかった。この三人はすぐにワハビー運動とハンバル派イスラムの教義に染まった。三人ともハナフィー派を離れてハンバル派に宗旨替えした。〈165〉このような経緯で、1803 年に彼らがメッカから戻った後、彼らはミナンカバウ地域でハナフィー派イスラムを広めずにワハビー運動を形作り Abdullah⁹ ibn Saud の依頼に従ってハナフィー¹⁰派のイスラムを広めたのであった。

ハナフィー派イスラムは Demak イスラム国で発展していた。1526 年に Sultan Demak は Sembung (Cirebon)、続いて Sunda Kelapa に艦隊を派遣した。Kin San は組

⁸ (訳)バクダッド南方の都市

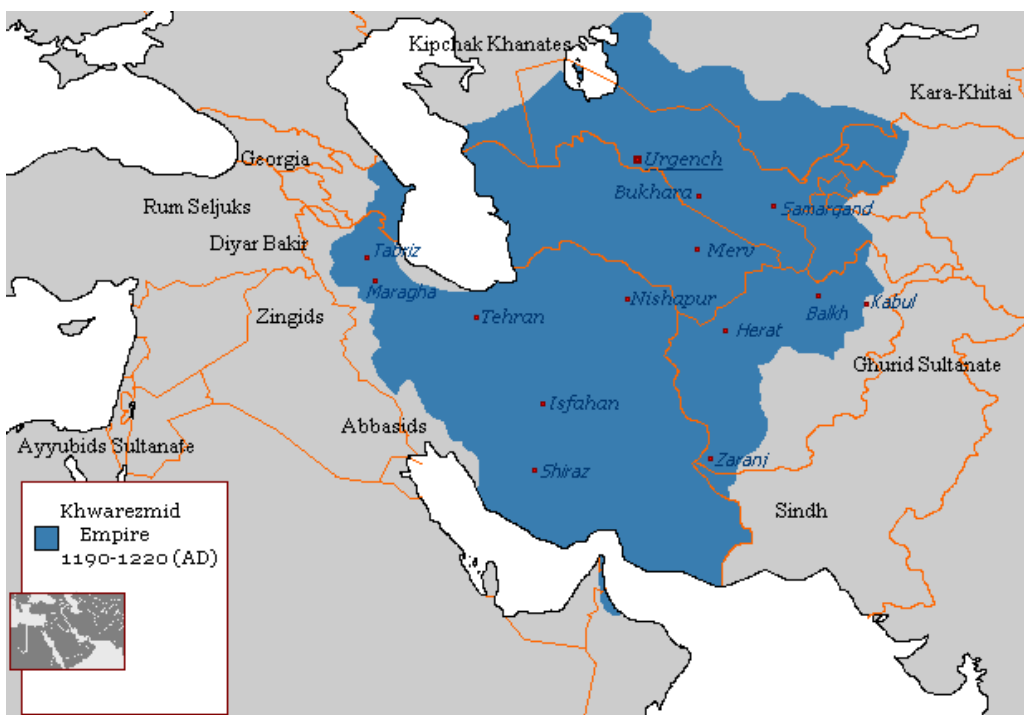
⁹ (訳)Abdul の間違いであろう。

¹⁰ (訳)Hanbali の間違いであろう。

織の中で通訳として働かなくてはならなかったので、71 歳という高齢を押して艦隊に同行した。Demak の艦隊は、後日 Fatahillah あるいは Faletahan という名で知られるようになる Demak 軍司令官に率いられていた。Demak 軍の将軍 Ari Talang は Sembung のイمام Tan Eng Hoat が修行している Sarindil に行った。Tan Eng Hoat と共に Demak イスラム軍は平和裏に Sembung に入った。Demak 軍の司令官は Sembung のイمام Tan Eng Hoat に Mu La Na Fu Di Li Hanafi (Maulana Ifdil Hanafi) という称号を授けた。Demak 軍はその後船に戻り、西に向けて出港した。Kin San は Tan Eng Hoat に賓客として一か月滞在した。これは Talang 廟の中国語年代記が語っていることである。

この話から、Sultan Demak はハナフィー派イスラムを信仰していたことがわかる。特に Demak サルタン国と一般的にジャワ島北海岸で発展していたイスラムはハナフィー派イスラムであった。

たとえばジャワ北海岸で知られているイスラムがマラッカから伝わったものとするとそのイスラムはシャフィー派であることは確実である。同様に、ジャワ北海岸のイスラムがスマトラ東岸の商人たちによってもたらされたとする、それはシーア派かあるいはシャフィー派の二つの可能性が考えられる。ジャワ北海岸のイスラムがハナフィー派であることからこのイスラムは、古い交易ルートでも新しい交易ルートでもないルー



トで、マラッカ海峡を經由せずに広まったことになる。トルキスタン、ウズベキスタンのブハラ、サマルカンドと関係させるためには、このマラッカルート経由という説は難し過ぎるからである。〈166〉

そのために両者間の連結が重要となる。この連絡を取った者が確かにいて、それは華人であった。

ジンギスカンは1215年に中央アジア遠征の指揮をとった。1225年にジンギスカンはパミール高原とアルタイ山脈との間のトルキスタンのオアシスにあったカラキタイ(西遼)を滅ぼすことに成功した。その後ジンギスカンは西に移動しペルシャとアフガニスタンを支配していたホラズム・シャー朝¹¹を粉砕した。中央アジアで最強と知られたこのイスラム国は各方向から包囲されてしまった。ホラズム軍は負けてしまった。ブハラ、サマルカンド、アフガニスタンのバルフ、バーミヤンなどの諸都市はジンギスカンに奪われてしまった。南に逃げた王はインダス河まで追撃された。元軍はイラン北部を目指して西に進みそのままコーカサスに向かった。元軍が通過したすべての国は粉砕され服従させられた。これらの国の諸王は南ロシアにあった諸王に援軍を頼んでいたため、ジンギスカンはロシアを攻撃し1223年にアゾフの北側でロシア軍を降伏させたのであった。¹²元軍はジェノバの正式な商業事務所のあるクリミアを略奪した。その後東に戻りトルキスタンに向かった。トルキスタンは元軍の総司令部になった。この総司令部はうまく計画されていた。屈服したサマルカンドは復興計画がなされた。ジンギスカンはハナフィー派ムスリムの中で生活していたが、彼自身は道教の信者であったので、彼は中国から道教の道士の丘処機(Tao Ch'ang Ch'un)を呼び寄せるように命令した。年を取ったと感じたジンギスカンは長寿に関する道教の教訓を聞きたかったのであった。彼はその後蒙古に戻った。1225年死去した。

その後、ジンギスカンからグユクに、そのあとはモンケが跡を継いだ。さらにフビライカンと続いた。ジンギスカンに対抗した恐怖に襲われたヨーロッパについてはここで解説する必要がないので省略する。1258年にモンケがバグダッドのカリフを壊滅させキリスト教ネストリウス派(景教)を奉じるモンゴル朝に替えた。〈167〉バグダッドを攻略した元軍の司令官が景教を信仰していたからであった。彼の友人は景教信者であるケレイトの女性と結婚した。バグダッドが北京に服従する最高の教区になった。1258年のモンケの死後、フビライが指導者の跡を継いだ。中国南部を移動していたフビライは、カーンの選挙に参加するために急いで蒙古に戻った。首都に到着する前に、

¹¹ (訳)イラン、アフガニスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン、タジキスタンを支配した。上図の青色箇所

¹² (訳)カルカ河畔の戦い

カーンとして選ばれるために同行の将軍たちに甘言を弄した¹³。このようにして、中国と蒙古の国境付近でフビライはカーンとして選ばれたのであった。湖南省と陝西省地域の行政を任されていたフビライの弟は雲南の南朝を征服するために南方へ派遣された。彼は南朝を 1253 年に征服することに成功した。雲南高地全体とハノイまでが支配されるようになった。その後、北に転進し、南宋の都を攻撃した。フビライは揚子江を渡り Wu Tsyang¹⁴を攻撃した。この攻撃は 1529 年に起きた。フビライ¹⁵が中国全土を支配しカーンになった後、フビライは自分を天子、王朝に元という名を採用した。

南シナ海沿岸の諸国、とくにチャンパ、安南、カンボジアに対するフビライの抑圧政策は功を奏した。これらの諸国は元の支配を認め朝貢使節を中国に送った。傲慢な性格のフビライは上記の諸国王自身が上都の宮殿に謁見しに来ることを要求した。このような希望は常に満足させられるものではない。このようなことから、これらの諸王自身が上都の宮殿に謁見しに来るように強制するために安南、カンボジア、ビルマに 1280 年と 1287 年の間に元軍を派遣した。〈168〉彼は漢人¹⁶を信用していなかったののでこの遠征では漢人を使わなかった。高官には蒙古人しか採用しなかったが、彼は宋の政府機関の王位を継承した。漢人が軍人になることは禁止された。これは漢人が軍に入隊することを禁止したことを意味する。彼らは農民として働くこと、道路を作ること、水域を守る仕事を与えられたただけであった。漢人の性格を有する蒙古人としてフビライは蒙古人たちに印を押されていたにも関わらず、元王朝を運営している間、漢人たちは蒙古人に支配されていると実に感じていたのであった。中国全土で蒙古人がみられ、高位の官職のすべては蒙古人に握られていたのであった。

1368 年に、元朝は農民の子の朱元璋(Chu Yuan Chang)によって滅ぼされた。朱元璋はその後、明るいという意味の明という名の新王朝を建てた。朱元璋は純粹の漢人であった。このように、明王朝は漢民族の王朝であった。明王朝の皇帝として朱元璋は洪武帝として知られている。彼は 1368 年から 1398 年まで治世を敷いた。彼の後継者として 16 歳の彼の孫¹⁷が指定された。この出来事は、王位を継承する権利を持っていると感じた王族の間の騒動を引き起こすことになった。最終的に北京を支配

¹³ (訳) wikipedia によると、部下の将軍たちがフビライをカーンとして選んだ、とある

¹⁴ (訳) 釣魚城、現重慶市合川

¹⁵ (訳) 原文ではフビライとあるがモンケの誤り

¹⁶ (訳) 原文では orang Tionghoa とあるが、意味を明確にするために漢人の語を使った。

¹⁷ (訳) 建文帝 允炆 (いんぶん)

していた永楽帝が南に移動して新皇帝に同調する軍を制覇することに成功した¹⁸。1403年、永楽帝が明王朝の中国皇帝に即位した。この永楽帝の治世は、一般的に東南アジアの特にジャワにおけるイスラム教の発展にとって極めて重要な時期であった。

第四節 明王朝時代におけるイスラム教の発展

既に明確になっているように、ジンギスカンが率いた元軍はトルキスタンのハナフィー派イスラム地域にその総司令部を設置した。トルキスタンからこの元軍はあちこちに派遣された。トルキスタン地方、ブハラとサマルカンドはハナフィー派が発展した中心地であった。多くの元軍将兵は上記の地方のイスラム女性と結婚した。フビライが中国全土を支配し元王朝を建てた後、元軍と蒙古人たちは中国全土と雲南高地で支配した諸国と南シナ海沿岸諸国に拡散した。元王朝が朱元璋に負けた後、任地にいた蒙古人たちは散り散りバラバラとなりその地域に拡散していき、国籍を捨て居住地の国籍に入った。

元王朝の支配時期に中国では仏教と道教だけが栄えていた。イスラム教の存在は述べられていない。イスラム教徒は少数派に入っていたに違いない。明時代にハナフィー派イスラムは発展の好機を得た。雲南、陝西、湖北の住民の大部分はハナフィー派イスラムを信仰していた。1406年の鄭和の遠征に同行した馬歡はハナフィー派のムスリムであった。鄭和提督自身は華人ムスリムであった。鄭和に率いられた大型ジャンク船62隻と27,800人の軍隊でのマラッカ海峡西側諸国への1431-1433年の遠征中にイスラム教徒を伴った人たちはジェッダに向かうアラブの船に乗船する機会を得た。彼らはジェッダからメッカを訪問した。多数のチャンパ人は、チャンパ国のイスラム化は11世紀に起きたと述べている。現在に至るまで、この説を正当化する証拠は見つかっていない。思うに、このチャンパ国のイスラム化はフビライに率いられた元軍による雲南高地と南シナ海沿岸の占領と関連付ける必要があると思われる。〈170〉1253年以来、雲南高地は元軍が占領していた。チャンパのイスラム教の宗派はハナフィー派である。チャンパ国のイスラム化は雲南地方の元軍駐屯期間中に起

¹⁸ (訳)靖難の変

きたはずである。たとえば、このイスラム化はチャンパと Pasai の商人たちが出会ったとすると、チャンパのイスラムはシーア派になったはずである。この宗派がハナフィー派であるからして、チャンパのイスラム化は元軍の駐屯を通じてということになる。すなわち 13 世紀の中葉のことであった。

第五節 ジャワ島のハナフィー派イスラム

永楽帝の最初の東南アジアへの使節は通訳の馬歡を伴って尹慶の指揮下で 1403 年に派遣された。この使節団はマラッカに停泊した。その後の 1405 年から 1431 年までの使節は鄭和に率いられ通訳の馬歡と費信も同行した。この二人はアラビア語が堪能であった。1407 年に、平和を脅かす福建の海賊を退治するために東南アジアにいた中国艦隊に Palembang 町は支援を願い出た。海賊の頭領陳祖義は捕縛され北京に連れて行かれた。これ以降、スリウィジャヤ時代以来たくさんの華人が住んでいた Palembang に鄭和提督が華人イスラム社会を構築した。Palembang 以外にも Smabas に華人イスラム社会が構築された。これらがインドネシアにおける最初の華人イスラム社会である。年がたつにつれ、ジャワ島北海岸やマレー半島、フィリピンに華人イスラム社会が次々と構築された。

この海岸のいくつかの地域における華人イスラム社会の成立は利害関係がある諸国と中国との商業関係と中国の影響の波及にとって極めて重要な意味を持っていた。通商と外交関係の構築の実行において鄭和提督は雲南出身の華人ムスリムを多用した。〈171〉その行為自体によりイスラム化が持ち込まれたのであった。各地でのムスリムたちの礼拝の必要性からモスクが建設された。ハナフィー派の教えに従い、説教やムスリムの義務の行為はアラビア語ではなく中国語で行われていた。

東南アジアでの通商と外交関係樹立の計画と実施を任された鄭和は Bong Tak Keng の支援を得た。彼の総司令部はチャンパにあった。Bong Tak Keng は鄭和提督によって計画された理想を実行するための権利を委譲された。Bong Tak Keng が東南アジアの華人社会の調整役への昇進は 1419 年に行われた。重要な港市の華人社会は華人惣代(Kapten Cina)が取り仕切っていた。華人惣代は、通商と外交の円滑化を通じて彼の率いる社会の富の蓄積に實際上責任があった。それ故、華人惣代

は有力者とみられる人たちが選ばれた。15 世紀にマジャパヒトの地域に入っていた Palembang の町では、マジャパヒト王 Wikramawardhana 王別名 Hyang Wisesa と華人女性の Ni Endang Sasmitapura との間に生まれた Swan Liong 別名 Arya Damar が推挙された。Swan Liong はモジョクルトで生まれた混血華人であった。1443 年に彼はスマランの火薬工場長になった。Bong Swi Hoo は¹⁹1445 年以降、華人惣代として Palembang に転任した。

マジャパヒトの都への海の玄関である Tuban 港市は極めて重要な場所になった。そこに駐在している華人惣代はマジャパヒト王と対応するのが上手でなければならなかった。1423 年に、元マニラの華人惣代であった Gan Eng Cu を Bong Tak Keng は昇格させた。マジャパヒト王との対応がうまくいったため彼は Suhita 女王より arya の称号を賜った。

1424 年以来、マジャパヒトの都に中国の特別公使(perwalian)が滞在した。マジャパヒトの初代中国公使は Ma Hong Fu であった。彼は 1449 年までマジャパヒトの都に滞在した。〈172〉その時 Wikramawardhana と Bhre Wirabumi 間の継承権に関する骨肉の争いによってマジャパヒトの支配は揺らいでいた。

1447 年から 1451 年まで、左 Brantas 河(Kali Porong)の河口に華人惣代 Bong Swi Hoo 別名 Raden Rahmat が駐在した。1451 年から~~1447 年まで~~²⁰、Bong Swi Hoo は Ngampel Denta と呼ばれる右 Brantas 河(Kali Mas)の河口に移動した。1478 年に死去した Bong Swi Hoo は Sunan Ngampel として知られている。このように、重要な北岸の諸港市は集められて統制された華人の社会と共に強力な華人惣代に支配されていた。

Ngampel の華人惣代 Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel は東南アジア全体の華人社会を調整するチャンパで最も有力であった Bong Tak Keng の孫である。彼はマジャパヒト王国の初代中国公使 Ma Hong Fu の妻の甥であった。Bong Swi Hoo は 1445 年に Bong Tak Keng の指示で Palembang の Swan Liong 別名 Arya Damar を補佐するためにインドネシアにやってきて、その後 Tuban に配置された。元マニラの華人惣代 Gan Eng Cu の娘と Tuban で結婚した。Suhita 女王から arya の称号を賜った

¹⁹ (訳) 誤解を防ぐために Bong Swi Hoo を追加した

²⁰ (訳) 原文の誤りと思われる

Gan Eng Cu は既に太守 Wilatikta Arya Teja であると既に特定されている。Serat Kanda の中では、Mustakim の息子の Sayid Rahmat はメッカから戻ったばかりであったと記している。母親からチャンパの Dwarawati 姫が既にマジャパヒトに向けて出発しマジャパヒト王の妻になっていると聞いて、彼はマジャパヒトの Dwarawati 姫を訪問する意志を抱いた。

チャンパ王が意味するものは、全東南アジアの華人社会を統括するための支配権を鄭和から移譲された華人惣代の Bong Tak Keng であることは既にはっきりしていると思われる。彼はチャンパで最高権力者であった。Serat Kanda と Babad Tanah Jawi ではマジャパヒトにやってきたその娘を Dwarawati と呼んでおり、マジャパヒトの都の中国大使 Ma Hong Fu の妻に他ならない。〈173〉Bong Swi Hoo は確かに Bong Tak Keng の孫であるから、Serat Kanda と Babad Tanah Jawi によるとチャンパ王の孫にあたる。Sayid Rahmat (Bong Swi Hoo) はメッカから戻ってきたばかりだと述べている。Bong Swi Hoo はメッカに巡礼に行ったことがあるのではないかと思われる。この遠征の 12 年後に Bong Swi Hoo は Swan Liong の仕事を補佐するために 1445 年に Palembang に配置転換された。Ma Hong Fu の妻はマジャパヒトに 1424 年に到着していた。Raden Rahmat の妻、太守 Wilatikta Arya Teja の娘である Nyi Gede Manila とは、1476 年に Bong Swi Hoo と結婚した元マニラの華人惣代の Gan Eng Cu の娘に違いない。結婚後 Bong Swi Hoo は Bangil の華人惣代に抜擢されその後 Ngampel に配置転換された。

Bong Swi Hoo はチャンパ出身のムスリムとしてシャフィー派ではなくハナフィー派を信仰していた。この Bong Swi Hoo の教えは後日 Raden Patah 別名 Pangeran Jin Bun の支配する Demak で続けられたのだった。Demak イスラム国はハナフィー派イスラムの国であった。上記のようにジャワ島のイスラム化はマラッカあるいは Pasai 出身の商人たちを経由して行われたのではなかった。チャンパをその起源とするジャワ島のハナフィー派イスラムは、鄭和提督に率いられた東南アジアでの通商外交関係を構築するために永楽帝に権限移譲された華人たちによってもたらされたのである。イスラムの拡散を Ngampel においてジャワでイスラム社会を構築し始めた Bong Swi Hoo 別名 Sunan Ngampel の教えにその基礎を置くと考えると、ハナフィー派イスラムの布教開始は 1451 年ということになる。

この時期は明王朝の衰退期であった。永楽帝と Hsuan Tsung²¹の死後王朝の輝きは陰りを見せた。王権の奪い合いが相続者たちの間で始まった。各々が特定のグループに支持された。明王朝は蒙古の反乱軍に対抗する力はなかった。八歳の幼帝 Ying Tsung(英宗帝)が宣徳帝の後継として指名され、宮廷外の民衆の生活についての知識を持たなかった家庭教師の Wan Cheng(王振)によって庇護された。〈174〉統治は混乱を極めた。蒙古の反乱に対抗中にこの皇帝は敵に捕らえられて捕虜になった²²。反乱者が身代金を要求するために彼はすぐには殺されなかった。英宗帝が捕虜になっている間、Yu 将軍(于謙)の提案で弟の Ching Tsung²³(景泰帝)が王位を継承した。統治を混乱させるために、幼い英宗帝は解放されたが景泰帝はそのまの地位にとどまっていた。景泰帝の死後、本当の主権争いが始まった。于謙将軍のグループは後継者として景泰帝の息子を、一方 Yang のグループは英宗帝の息子を担ぎ上げた。両方とも負けたくなかったので、第三者に漁夫の利を与えることになった。于謙を助けていた Shih Heng (石亨)将軍は北京を攻撃している蒙古軍への攻撃を拒否し、支配権を奪取して、何の能力もない英宗帝に圧力をかけ後日自分の王朝を建てることと比較して、英宗帝を再び皇帝にしようとした。しかしながらこの計画は失敗に終わった。石亨は斬首された。グループ同士の争いはますます燃え盛り、明王朝の破滅をもたらした。中国と華僑たちとの連絡は途切れてしまった。鄭和の計画によって構築された華僑で構成された社会は衰退した。Bong Swi Hoo にとって、その発展を進める希望が無くなってしまった。それ故、直ちに彼は方向転換したのだった。彼は原住民(Jawa 人)たちの間で新しいイスラム社会の構築を始めた。彼は Bangil から Ngampel に転居した。Ngampel はジャワ島におけるハナフィー派イスラムの拠点になり、1451 年以降、Demak のハナフィー派イスラム国建国の準備を行ったのであった。Raden Patah 別名 Jin Bun は Bong Swi Hoo の弟子で、ジャワ・ヒンドゥーのマジャパヒト王国を滅ぼし、Demak イスラム国を建国することになる。

第五章終わり

²¹ (訳)宣徳帝 Xuande であり、原文の Hsuan Tsung は唐の玄宗皇帝であるから間違いと思われる。

²² (訳)土木の変

²³ (訳)文章から見ると Ching Tsung ではなくて景泰帝である。

訳出終了 2015/9/10

校正 2015/10/06

